

可能性の中心としての『哲学音楽論』

平 井 太 郎[※]

今私は「何を書くべきか」と書きつけそのまま筆が止まる。キーボードの連続音の後、沈黙が訪れ、戸外を車が流れる音が寄せては返す波のように響いている。このように言葉と音とが同時にあること／ともにあること——それが本書『哲学音楽論』で「哲学音楽」と呼ばれる現象であり、またどのようにそうした現象に近づけるかが本書の主題にほかならない。

そのように主題を設定したとき、素朴には「歌」に手がかりを求めることになるだろう。たとえば黄金期のミュージカル／映画の頂点をなす『サウンド・オブ・ミュージック』の主題歌のように。ここでは次のように高らかに歌い上げられる。「私の心は丘に満ちた「音楽の音」に溢れ、耳を打つ全ての歌を歌い出す」と。ここでは自然と人との間に断絶は想定されない。そしてその証が「音楽の音」であり「歌」だとされている。たしかに主人公がさまざまな無理解に曝されるように、両者の間の断絶は垣間見えないわけではない。しかしそれは「音楽の音／歌」によりかならず繕われ癒される。こうしたロマン主義的な言葉と音との幸福な関係は、ある時期から現在に至るまでくりかえし目にし耳にすることができるだろう。

だが本書はそのような途を取らない。言葉と音のロマン主義がはらむ理想論が、時として暴力的な啓蒙につながることを十分に理解しているからであろう。このことを思い起こさせるのが、『サウンド・オブ・サイレンス』という「歌」である。それはちょうどミュージカル／映画の終焉を告げるかのような『卒業』という名のプログラムの主題歌であった。そこではこう絶叫される。「馬鹿な。みんな知らないだけだ。俺の言葉を聞け。俺の腕を取れ。」と。このようにロマン主義は、それを共有しない人びとを「馬鹿」扱いし、言葉と力で介入しようとしがちである。続いてつぶやかれる「だが、ぼくの言葉は沈黙の井戸に消えてゆく」という深い疎外感も、そうした言葉と力による介入をあきらめさせるどころか、さらに執拗に促することになるだろう。

これに対して本書におけるロマン主義からの転回を基礎づけているのが、「サウンドスケープ」という視点であり、啓蒙にかわる「音楽教育」という営みである。「サウンドスケープ」は『サウンド・オブ・サイレンス』とほぼ同時期に、きわめて似た問題意識から生まれている点に注意される。後者が高度消費社会における都市を覆い尽し、しかも多弁で喧騒に満ちたネオン・サインに「沈黙」を見出しているように、「サウンドスケープ」が見出される契機も「騒音公害」であった。

そのうえで両者のたもとを分かつのは、言葉と音がともにあることの多様性を許容するか否かという点であろう。『サウンド・オブ・サイレンス』では「万人に共有される言葉による歌」が想定されている。しかし「サウンドスケープ」は、その時期、その場所、あるいはそこに関わる人ごとに異なった、言葉と音のともにあるあり方を丹念に——言葉と音の双方で——捉え、分かち合おうとする。その意味では「サウンドスケープ」とは、通常理解されているように、たんなる音をめぐる環境である以上に、音をめぐる経験の固有性を指していよう。であればこそ、この新しい語が創造されるとき、Landschaft/ Landschaftenから派生したlandscapeの語根-scape、すなわち通常の英語であれば-nessや-ityなどに相応する語根が取られたのであろう。あえて言えば「サウンドスケープ」は「音らしさ」あるいは「音そのもの」と捉え返すこともできよう。

[※] ひらいたろう 弘前大学大学院地域社会研究科 准教授
of-hirai@nifty.com

だからこそ「サウンドスケープ」をめぐる営みは尽きることがない。それは今、ここ、そして、そこに行き逢った人によって立ち上げられる出来事そのものだからである。そしてその経験を言葉と音の双方で共有できるように立ち上げようとするのが、本書で遂行される「音楽教育」にほかならない。

その意味で本書の白眉は、スーザン・ソンドクやロラン・バルト、ロバート・ウォーカーなどの思考との対話以上に、弘前大学の学生たちや地域の住民とともに進められた実践記録であり、筆者自身が師レイモンド・マリー・シェーファーとともに紡いだサウンド・エデュケーションのいくつかの断片的挿話である。それらを一つひとつ追ってゆけば、ここで言われる「サウンドスケープ」や「音楽教育」なるものの射程の奥行きを捉え返すことができる。それらはしばしば操作主義的な工学や教育法に回収されがちである。これに対し、本書に収められた記録や挿話を反芻すれば、それらが安易な普遍化と理想化をともに拒む息の長い営みであることが体得されてこよう。ここであえて「体得」と言ったように、本書の読後に得られる理解は、たしかに言葉を介してのものなのではあるが、あくまで目を耳を揺さぶる身体感覚の水準に降り立っている。それは一語一語、日本語の息遣いに配慮して組み上げられた記述のなせる技にほかならない。同時にそれは「哲学音楽」という困難な主題設定、すなわち言葉と音のともにあるありようをあえて言葉で伝えようとする試みに、たしかに一つの解が与えられたことの証でもある。

このような野心的な知の冒険者と時と場を共有できることの奇蹟に感謝しつつ、本書を1つの出発点として、私自身をふくめ多くの読者がそれぞれのかたちで「言葉とモノゴト」の関わりようにかんする探究を深めあい、分かちあうことを希望する。